

Title	新自由主義的セクシュアリティと若手フェミニストたちの抵抗
Author(s)	元橋, 利恵
Citation	架橋するフェミニズム : 歴史・性・暴力. 2018, p. 25-36
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/68080">https://doi.org/10.18910/68080</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 新自由主義的セクシュアリティと 若手フェミニストたちの抵抗

元橋利恵

(大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程)

牟田和恵（編）『架橋するフェミニズム—歴史・性・暴力』第3章

2018.3.20 電子書籍版刊行

<https://doi.org/10.18910/67844>

ISBN978-4-87974-740-2 C3836

JSPS 科学研究費基盤（B）課題番号 26283013



# 新自由主義的セクシュアリティと若手フェミニストたちの抵抗

元橋 利恵

## 1. わたしのアソコには呼び名がない！？

2016年の12月19日、私たちは本研究プロジェクト<sup>注1)</sup>の一環としてイベント「私のアソコには名前がない！—『中国版ヴァギナ・モノローグス』から私たちへ」を京都にて開催した。ヴァギナ・モノローグス（原題：The Vagina Monologues）とは1996年に上演された、イヴ・エンスラーによる女性器をテーマにした女性の独白形式をとった作品である。世界各地で舞台化されており、日本でも幾度か上演されている。岡野章において触れられている通り、韓国における「慰安婦」にされた女性たちによる日本大使館前での抗議活動である「水曜デモ」の1000回目を迎えた集会でも、エンスラーによるモノローグに託したパフォーマンスが行われるなど、女性への暴力に対抗する作品として言及されつづけている。

本イベントは、中国で大学生を中心として行われてきたヴァギナ・モノローグスの脚本づくりと舞台化運動の指導者の来日をきっかけに開催されたものであった<sup>注2)</sup>。ヴァギナ・モノローグスは、従来タブー視されてきた「ヴァギナ」という言葉を女性自身が口にし、自身のからだや性について語ることが主題である。今日においても中国の若い世代の女性たちによって「ヴァギナ語り」が再び運動として行われているのである。

現代の日本においても、女性器はタブー視されていることには変わりがない。男性器の呼称である「おちんちん」が冗談や笑いをもって口にしやすいのに対して、「おまんこ」は口に出すべきものではないとされ、忌避される。とくに女性にとっては、まず性的なことを口にするに自体にタブーがあることに加え、元々日本における「おまんこ」は女性器の呼称であると同時に性行為そのものを指す、しかも卑猥なニュアンスを含む言葉としてあった<sup>注3)</sup>こともあり、自分自身の性器であってもその呼び名を口にするには幾重にもタブーがある。しかし、言うまでもなく、女性にとって女性器は性行為のためだけのものではなく、自身の身体の一部であり、生命を生み出す器官であり、健康や自尊心など生活全般に大きく関わる。にもかかわらず、病院にかかった際やセックスの時などの自分の女性器に言及する必要がある時でさえ、それを口にすることは出来る限り回避されるか「アソコ」とぼやかして言及されるというのが、現代であってもよくあることなのではないだろうか。

ヴァギナ・モノローグスは、1970年代におけるウィメンズ・リベレーション（以下では、リブ）と呼ばれる女性解放運動の一つの主題であった「性の解放」の延長に位置付けられる。性の政治化こそがリブの大きな特徴であり、当時のリブ運動は、「セックス革命」<sup>注4)</sup>と呼ばれるアメリカ社会全体の流れにもつながり、大きなうねりとなっていった。アメリカのリブの様子は日本にも伝えられ、日本でも独自の運動が展開されてきた。しかし、その1970年代に比べて性をめぐる環境や情報には様々な変化があった今日でも、女性たちにとって自分のヴァギナは、滅多なことがない限り直視することもなければ語ることもない、気まずさを覚える部分である。

本稿の目的は、なぜ今女性たちが女性器を自らの言葉で呼べるようになることが重要であるのか、1970年代の女性運動を参照しつつ、現代の女性をとりまく性規範や2010年代の女性たちの活動を通じて考えることである。その背景には、本稿の内容を少し先取りすれば、現代は性的情報が溢れており、女性たちのセクシュアリティに関してもあからさまな性行動の制限や強制ではなく自由であることが前景化するようになってきた。しかしそのような中で女性達は、セックスにおいて、より巧妙な方法で従属に仕向けられ、ゆえに自らが抱えている葛藤を問題化することが困難であるという現代的な課題に直面している。

本稿ではまず、1970年代のリブと呼ばれる運動のなかで女性達は女性器に注目することによってどのような問題に向き合い、主題化してきたのかを確認する（第2節）。次に第3節では、2000年代以降女性たちの「性解放」はどのようなものとして現れているのか、女性誌『an・an』における「セックス特集」と若年世代の女性の置かれている社会的状況を手がかりに論じていく。そして第4節では、現代の女性達はセクシュアリティの問題に対してどのように葛藤し、そしてどのように突破しようとしているのか、2010年代に起こった若い世代のフェミニズム活動を通して見ていく。セクシュアリティについて

て女性たちが直面する現代的な課題とはどのようなものであり、私たちはその課題に対しどのような戦略を取り得るのかを考えていきたい。

## 2. リブにおける身体・性の政治化と女性器への注目

### 2.1 なぜヴァギナだったのか

1960年代後半から1970年代にかけて盛り上がりを見せたリブ運動は、1960年代の公民権運動や学生運動を経てなお社会全体に残存し、しかもそれらの運動の中にもあった、女性蔑視や女性差別からの解放を求めた女性たちによって立ち上げられた。女性たちの公的領域への参加を拒んでいるのが、私的領域における男性支配であるとされ、1970年代前半には第2波フェミニズムの理論的支柱となる本が多く出版された。その代表的なものの1つがケイト・ミレットの『性の政治学』（1970年）である。ミレットは1800年代以降の政治、文学、思想の分析から、家父長的な家族制度による男性から女性への支配を説いた。愛の名の下に遂行される家庭生活や性生活といった私的領域で、女性は自分の身体や性から疎外されている。このような抑圧から目を背けずそれらをなくしていくために、女性の身体や性の政治化は運動の支柱であったのだ。そのようななかでも、女性器は大きなテーマとして言及され表現されてきた。

リブで大きな役割を果たしたのが、コンシャスネス・レイジング（consciousness raising、以下、CR）という手法であった。女性たちが集まってそれぞれが抱える悩みを語り合うなかで、それらは個人的な問題ではなく社会構造に規定されている問題であることに気づいていくプロセスを意味している（荻野 2014: 7）。CRは、女性たちの自己解放の方略として、後述する日本のリブでも自然発生的におこなわれていた（木村 2000）。

このようなCRの手法によって、重要なテーマとして語られたのが女性器であった。当時女性は自身の性について無知であるのが当然とされ、殆どが男性であった医師の教えに従うのが当然とされ、アメリカでは1973年になるまで中絶が犯罪として禁止されていたなか、女性の健康を自分自身で守ろうという健康運動が発展した（荻野 2014）。1971年、それまでに自分の性器を直視すらしたことがなかった女性たちが、ロサンゼルスにある本屋に集まり自分の子宮口をみる実践が行われたことは有名である。カリフォルニア州の主婦、キャロル・ダウナーが率いたものであるが、ダウナーは30人ほどの女性たちを前に下着を脱いで机の上に寝そべり、自分の膣に膣スペキュラム<sup>注5</sup>を挿入し、自分の子宮口をみる実演をした（荻野 2014）。女性が堂々と自分の性器にふれる、医療専門家の道具をわがものとして使うことは当時のタブーを打ち破ることであった。

1970年代以降のフェミニズムの標語の1つに、「わたしの身体はわたしのもの」という言葉がある。この標語には、女性の身体に対する性的侵害を問題化し、女性の身体は持ち主である女性自身のものだと強調することで女性をエンパワメントする意味があり、現在でも繰り返し使われている。イヴ・エンスラーは『ヴァギナ・モノローグス』の「はじめに」において、「ブッシー」でも「陰部」でもない、「ヴァギナ」と口に出して発音することこそが重要であると述べている。

わたしは「ヴァギナ」と言う、なぜなら、いたるところで女たちのヴァギナに忌まわしいできごとが起こっていると、数字が教えてくれるから。（中略）わたしは「ヴァギナ」と言う、なぜならこんな忌まわしいできごとがなくなってほしいと思うから（中略）それを可能にする唯一の道は、女たちが罰や報復を恐れずに堂々と語れるようになることだ（エンスラー 2002: 8）。

このように、女性の身体の中なかでも最もタブー視されてきた女性器を女性が自ら「ヴァギナ」と発音することは、歴史的におこなわれ、隠蔽され、そして今現在も行われている女性に対する暴力を正視し、奪われ続けてきた自分の身体に対する決定権やコントロールを取り戻そうという意味も有している。女性器は「わたしの身体」でありながら最も女性から奪われてきた場所なのである。

さらに、女性器は実際に女性が性的快楽と満足を得るための実践の中で具体的に言及された場所でもあった。1976年のシェア・ハイトによる『ハイト・レポート』では、膣でオーガズムを感じない女性は「成熟」していないという、従来支配的であったフロイトのモデルに対して、実際には女性たちの3分の2がペニスの挿入ではオーガズムを感じていないという女性たちの体験談を示した。アン・コートはエッセイ『膣オーガズムの神話』で、従来女性のオーガズムは膣で感じるということが正当とされてきたことに対して、膣オーガズムは男性を喜ばせ満足させるほうに視点が置かれているという批判をおこな

った<sup>注6)</sup>。

このように、1970年代では、クリトリスオーガズムこそが女性の快楽であると主張する議論がおこった。女性にも性的欲求や性的快楽が存在することを認め、それらを追求することが正面から語られたのである。ここでは、膣オーガズムかクリトリスオーガズムかという論争はさておき、女性器は女性の視点から性的快楽を追求する文脈において注目されてきたことを確認しておきたい。

そして、女性器は当時の運動において思想、世界観の転換の象徴という精神的な意味も非常に大きかったといえる。フェミニスト・アートの分野では女性器の表象が多くみられる。ジュディ・シカゴの作品で国際的に有名な「ディナー・パーティー」(1979年公開)は、絵皿とワイングラスが並ぶ1辺13席、計39席の正三角形のテーブルからなる巨大な作品である<sup>注7)</sup>。作品におけるテーブルの上の皿には、その席に座る女性をイメージしたとおぼしき女性器を象った絵柄が色鮮やかに描かれており、それらは全て異なっている。シカゴは、1975年、自伝“through the flower”(邦題では「花もつ女」)を出版するが、そのタイトルの通り、「女性器=花」を「通して」表現すること世界をみるのが彼女の中核的なテーマであったことがわかる。「ディナー・パーティー」はこれまで女性の領域とされてきたがために低く価値づけられてきた刺繍などクラフトを用いたボランティアの女性たちによる共同作業で制作されたことから、作品全体を通じて1つの思想を体現しているといわれる(北原1998)。女性器は、女性という存在であるがゆえに貶められてきた複雑性と多様性の価値観をあらわすものとしても注目されてきたのである。

このように、女性器はフェミニズム運動において、女性が女性であることを通して世界をみて掴むという主体性の象徴として注目されてきた。それは「それをもっているために女であり、そのために男を誘惑し、それが原因でおとしめられ、女の中核でありながら、女自身から最も女が遠ざけられているもの」(上野1988:19)であり、女性が自分自身を回復させていき、性において主体になるためには、女性器に向き合うことは避けて通れない、という意味をもっていた。

## 2.2 日本における「おまんこ」

では、以上のようなアメリカの運動における女性器へのこだわりは日本の運動ではどのようにみだせるだろうか。日本のリブ運動においても、「わたしの身体は、わたしのもの」という標語の通り、セクシュアリティの議論が展開され、日本独自の議論がなされていった。1977年に出版された中山千夏の『からだノート』では、自前の言葉で自らの身体を語ることに、特に女性器を「おまんこ」と呼ぶことについて言及している(中山1977)。「よごれ」「ワイセツ」「陰」であると捉えられてきた女性器をいかにポジティブなものとして捉えなおしていくかの問題提起であった。日本でも、集まった女性たちが自分の経験や思いを語り合うCRを実践する講座が多く開かれ、1960年代アメリカで女性たちが自身の手で出版しベストセラーになった『OUR BODIES, OURSELVES』の翻訳運動が荻野美穂や上野千鶴子ら京都のフェミニストたちによって行われた。その結実として、日本でもその完全な翻訳として1988年にウィメンズブックストア松香堂書店から『からだ・私たち自身』が出版された(荻野2014)。そこでは、女性器の呼称について正しい呼び名を与えるだけでなく、陰唇を性唇に、内陰・外陰を内性器・外性器、恥毛を性毛、恥骨を性骨、生理を月経といったように言い換えることによって、従来から「恥」や「陰」のレッテルが貼られてきた呼び名を変えることも提起された。

一方で、性的解放について、日本ではアメリカとは異なり、性的欲望や快楽の追求には一定の制約があった。田中亜以子は日本のリブ運動の特徴として、性器的なセックスに代わるものとして「コミュニケーションとしてのセックス」が議論されていたと分析している。家父長制の下で女性が子どもを産むための「生殖の性」と男性が快楽を得るための「快楽の性」に二分され、女性の性は男性のコントロール下に置かれてきた。リブの女性たちはその性の二重基準をこそ告発したため、「生殖の性」「快楽の性」をどちらも否定し、「性器的な快楽」に代わるものとして「相互性」や「対等性」を実現するという意味での「コミュニケーションとしてのセックス」が戦略的に追求されたのである(田中2007)。

そのようなリブの戦略的背景には、アメリカでは1965年であった経口避妊薬(ピル)の認可は、日本では1999年になってからだったという、女性が妊娠の不安から一定程度解放されるという意味での性的自由を実際に手にする条件が大きく制限されていたとも言えるだろう。ピル解禁をめぐっては、日本ではピンクのヘルメットを被りピル解禁を訴えた「中ピ連(中絶禁止法に反対しピル解禁を要求する女性解放連合)」がウーマン・リブのイメージとして語られがちであるが、例えば1970年代はじめに結成されたグループである「ウルフの会」の機関紙『女から女たちへ』からは、日本のリブがピルに対しては懐疑的であったことも窺われる。秋山洋子は「ピルは本当に良いものか」のなかでピルが「夢の避妊薬」

と言われるほどには健康上安全ではなく、相手の協力なしに避妊ができてしまうことから「避妊は女性の義務、セックスは男の権利」という論理にすり替えられてしまう危険性があることを指摘している（溝口・佐伯・三木編 1994: 265-266）。日本のリブでピルが否定された理由について、松本彩子は①男の避妊責任を免罪するというピルの性質上、女のみが避妊責任を負わされることの拒否、②優生保護法改悪とピルの認可をトレードしようとする国家、さらに製薬会社や産婦人科医に利益をもたらすために「ピルを飲まされる」ことの拒否を挙げている（松本 2005）。くわえて、田中は日本のリブはアメリカのリブ運動と比較して女性の生殖機能を肯定する姿勢が強く、「快樂」のために自らの生殖機能を操作することが受け入れられなかったと分析している（田中 2007）。

以上のように、日本における性的解放は、アメリカのリブ運動の影響を受けながらも、「快樂」の追求よりも、「コミュニケーション」という性的なイメージを避けたキーワードによって性的解放が語られた。そのため、セックスにおいて性器的なものは重要視されにくく、女性器はあくまで女性の中から健康という文脈で語られてきた傾向があったといえよう。

他方で、一般の「進んだ」女性向け雑誌では当時のアメリカの性解放や風俗について伝えられ、女性の性解放についても肯定的に語られることはあった。『an・an』は1970年創刊の2, 30代向けの女性誌である。その読者層は1971年創刊の『non-no』と並んで「アンノン族」と時代を先取りした存在として呼ばれたが、とくに『an・an』は、当時までの女性誌が触れなかったセックスにかかわる記事を積極的に掲載したことで知られる。しかし、北原みりによれば、その『an・an』においてセックスの語られ方には2000年代以降大きな変化があるという。次節では『an・an』のセックス観の変化を題材に、2000年代以降の性規範の特徴についてみていこう。

### 3. 『an・an』にみる性解放から性管理への変化—新自由主義的セクシュアリティ

#### 3.1 「モテ」ベースのセックス追究

北原は『アンアンのセックスできれいになれた?』（2011年）のなかで、1970年代から2000年代までの『an・an』におけるセックス特集の内容を比較している。そこには、『an・an』の「セックス特集」が描き出すセックスが1人の女性の快樂追求から、恋愛や「モテ」ベースのテクニック追究へと変化していく様子がみてとれる。以下では、まずは北原による『an・an』におけるセックス特集の経年変化を概観してみよう。

まずは、1970年代の『an・an』について、北原は、①ヌードの多さ、②ウーマン・リブに肯定的、③反体制という3つの点を指摘している。特にウーマン・リブについてはニューヨークにおけるバレリー・ソラナスによる「SCUM-Society for Cutting Men—男ぶっ殺し協会」（『an・an』による訳）を最前線で紹介し、「スリッパよさらば、ブラジャーよさよなら！男の目を楽しませるためのヒラヒラや、おっぱい持ち上げ機なんかいらんよ！！女性は自由になろう！フリーセックス万歳！！」というのが彼女らのスローガン」と紹介している（北原 2011: 21）。その後の1980年代でも、「みずからの欲望について語る」、「徹底的に遊び」「ハチャメチャ」「すごくエロく、明るく、おバカ」な勢いがあると評価している（北原 2011: 45）。

北原によれば、1990年代からは、男性と同じようにセックスをする、というモデルではなく肩の力を抜き自分のペースでセックスを楽しもうという等身大の姿勢がみてとれるという。1995年には「セックス白書」にて、女性たちがいかに積極的に性行動をおこなっているかのレポートが特集される。そこでは「女から誘う」ことを当然のこととして扱う。

アンアンが旗を振らずとも、読者は一人立ちしていたのだ。この号はアンアンが新しい価値を提案するのではなく、アンアンが読者のセックスを紹介することでセックス特集が成立する、初めてのケースだったかもしれない（北原 2011: 91）

それが、1990年代後半は「愛のあるセックス」が前面に押し出されるようになる。つまり、ただセックスをするだけでなく、愛のないセックスはよくない、愛のあるセックスこそがよいという価値観が打ち出され始める。1999年には「愛のあるセックスだけがあなたをきれいにします」という標語が用いられる。この年にはセックス特集が2回生まれ、より熱心にセックスは語られるようになる。それと共に、セクステクニックが次々と登場する。

2000年にはそれまではでてこなかった男性の語り手が登場し読者女性たちにテクニックを説くようになる。北原が、「セックスは2人ですものなのだから。『喜びも半分、仕事も半分。』そんなメッセージがアンアンの1ページ1ページから感

じられる」(北原 2011: 129)と評価するように、それまでは女性が1人で堂々と映っていたヌードが、カップルのショットが二人の出会いや恋愛の歴史とともに紹介されるようになるなど、男性と女性が一緒であることが強調されるようになっていく。

2003年には、「セックスできれいになる」から「恋に効く」に標語が変更される。「モテ」、恋愛、男性のオンリーワンであることがセックスの前にくるようになる。恋愛テクニックとして、「攻略法」「勝ち組」「負け組」という言葉とともに、具体的なテクニックが提示されるようになる。「尿道口マッサージ」や「バックスタイルでの攻め」、など複雑な技術に加え、射精後のペニスを舐める「お掃除フェラ」、射精に至らなかった男性を励ます、など身体だけでなく「男性の心を掴む」テクニックである。しかも、積極的すぎると男性のプライドを傷つけるため、「彼から『指導』してもらい」つつ、あくまで技術よりも「一所懸命」であることが重要であるとされる。セックスのきっかけづくりからその気になるように「誘導」し、最後まで女性が男性を手上に乗せつつ遂行する。それが、セックスは1人でするものではなく「コミュニケーション」であり「カレとの関係を深めるための技術」である、という意味でテクニックとして紹介されている。

以上のようなセックス特集の変化からまず見えてくるのは、かつてないほどにセックスの技術を懸命に追究する女性たちの姿である。その意味で、女性たちは「解放」され、膨大なセックスに関する情報を手に入れられているといえる。北原は2000年代後半のセックス特集の変貌に対して、戸惑いをもって「ビジネス書自己啓発」に例えている(北原 2011: 162)。「固定観念があなたのセックスをダメにする」(2006.5)、「より良く生きるためには、より良いセックスが必要」(2006.5)など向上心をあおりポジティブであれという姿勢はまさにビジネス自己啓発書そのものである。また2009年特集のハウツーDVDについても、女性があらゆるテクニックを駆使して男性を満足させる様子から「お仕事化」と表現する(北原 2011: 182)。

それでは、このような2000年代以降のセックス特集の変化は、若年世代の女性が置かれている社会状況の変容とどのような関わりがあり、そして女性たちにとってどのような意味を持ちうるのだろうか。1970、80年代の『an・an』では、女性が性的に奔放であることを正面から肯定し、セックスや快楽が好きであるからセックスを語るのだという、いわば自己実現の延長としてセックスがあるとすれば、2000年代のそれは、男性との関係の構築、つまり「モテる」ことが重要なこととして先にあり、そのために自分の身体を使って男性を喜ばせるといふ、関係構築のための投資の手段としてセックスがある。前者が、自己の欲望に立脚した自由主義的な、つまり自己解放的なセクシュアリティの在り方であるのに対し、2000年代のセクシュアリティはどのようなものとして捉えられるだろうか。

### 3.2 マネジメントされるセックス

1980年代以降の後期近代論やリスク社会論では、現代社会において個人は「自らの起業家となって自分自身の人生を形成」(ニコラス・ローズ)する主体であることが要請されていると論じられてきた。高度な消費資本主義社会において、個人は自らを商品として価値ある存在として高めていくことが求められ、学校教育や職業選択の過程を通じてそのように自己形成していく。ウェンディ・ブラウンは、新自由主義を経済政策としてだけでなく社会や政治、さらには人間そのものに根本的変化をもたらす原理として説明する(Brown 2015=2017)。人々はますます「投資家」や「消費者」など経済的関心で行動する「ホモ・エコノミクス」として振舞わざるをえなくなっていくのである<sup>注8)</sup>。

日本社会では、戦後の日本国憲法の制定以来、1985年の男女雇用機会均等法、そして1999年の男女共同参画社会基本法の制定を通して制度的な男女平等については一定程度進展してきた。2012年以降の第二次安倍政権のもとでも、「女性活躍」をその政策における最重要課題と位置づけているように、制度的な男女平等の実現は社会的正当性を獲得してきたと言える。同時に、特に若い世代には、「男女平等」はすでにある程度達成されたものとして前提となっており、今の時代は、女性は男性と対等もしくはそれ以上に努力し、競争に勝ち残らねばならない、という規範が形成されているといえる。

しかし、実際には社会のなかで女性が主体的に活躍できる条件が整えられているのかということには多くの研究者が疑問を呈している<sup>注9)</sup>。加えて、現政権は新自由主義的イデオロギーを強く内包しており、グローバル企業の要請に応えるために規制緩和政策を進める一方で、所得再分配つまり国家による家族の支援や保護は否定する傾向がある。そのために、格差拡大が肯定され個人の自己責任が強調される。特に家族内ケアについては、現実にはもっぱら女性の自己責任として降りかかってくる。女性たちは社会の公的領域で活躍することと、親密な領域や家庭領域で優れたケアラーであることのいずれも自分の責任として引き受け、自らの価値を高めるための努力をすることが求められている。

だがそのような公的、私的領域双方における「責任」を果たそうにも、現実には非正規雇用の約7割は女性であり<sup>注10)</sup>、



仮に正規職についていたとしても保育事情の悪さから、キャリアを手放さずに済む条件をもてるかは偶然が左右するところが大きい。さらには、婚外出産がタブー視され、産み育てと結婚がセットであることが前提である日本社会では、結婚による家族形成が「現実的」であり低リスクであると理解される。つまり、こうした結婚および家族形成を含む産み育てとキャリア形成の同時達成は若年女性の人生マネジメントにおいて切実な課題となっている。

キャリア形成と家族形成を成功させたいと願う女性たちにとって、セックス、恋愛、結婚、その後の産み育ては、現代社会において「生き残る」ために自らの「価値」を高めていく手段であり、経営的視点をもってマネジメントしていく対象となる。そこでは、セックスは単純な快楽ではなく「うまくやる」ものとして現れるのである。

言い換えれば、現代社会を生きる女性たちは「市場原理を内面化したセルフ・マネジメントの主体」（佐藤 2009: 50）として自己のセクシュアリティを形成せざるをえない。これは、佐藤が述べるように、「法律、制度に介入して『効果的』な競争を創出し、競争原理によって社会を統治しようとする統治技法」（佐藤 2009: 49）である新自由主義に即した主体形成のあり方である。このように見るならば、セックスがマネジメントすべき対象となり、ビジネス自己啓発さながらに扱われる 2000 年代の傾向は、以下にみる 1970 年代との対比によって明らかとなる「コミュニケーション」の変化をみても、「新自由主義的セクシュアリティ」と名付けてよいのではないだろうか。

### 3.3 社会構造の後景化と不平等の自己責任化

新自由主義的セクシュアリティは女性たちにとってどのような意味を持ちうるのだろうか。ここでは、日本における 1970 年代のリブ運動において、「コミュニケーションとしてのセックス」が追求されたように、2000 年代の「セックス特集」でもセックスは「コミュニケーション」であることが前面に出されていることに注目したい。ただし、この 2000 年代における「コミュニケーション」は、リブが本来目指していた「コミュニケーション」とは似て非なるものとして現れている。

田中（2007）は、リブにおいて「快楽」よりも「コミュニケーションとしてのセックス」が志向されたことについて、相互性や対等性、そして女性の能動性の獲得を目指すものでありながらも、それこそが「正しい」セックスであるという規範に女性を囲い込むことになるというパラドックスがあると指摘した。2000 年代では、上記でみてきたように、社会的不平等や格差が拡大するなかで女性が「安定」を確保し、自らの「価値」を保ち高めていくなかでは、パートナーとの関係維持は重要な関心事となる。ゆえに、セックスにおいて「コミュニケーション」が強調され規範化することは、パートナーの機嫌を損ねないこと、関係に波風を立てないことが、自身の感覚や快楽よりも優先されていくことに繋がる。

ブラウンは、ミシェル・フーコーによる講義<sup>注11)</sup>を整理し、自由主義から新自由主義への転換における特徴をまとめている。

新自由主義においては、競争は、自由主義経済が強調する市場の基本原則と力学としての交換にとってかわる。これは、そうした一見些細に見える置き換えの一つであるが、それは構造転換であり、他のさまざまな原理や場に影響を与える（Brown 2015=2017: 66）

市場原理があらゆる領域に拡張され、その中心原理である競争が社会原理となっていくことによって、既存の不平等が正当化され規範化されていく（Brown 2015=2017: 66）。そして、競争において必然的に生み出される「勝者」と「敗者」といった不平等こそが社会原理となっていくのである。同じように、労働者自身も、いかに貧困化し資源に乏しくとも自らを人的資本とみなし競争する企業家として変容する（Brown 2015=2017: 67）。

ブラウンの議論を敷衍すれば、1970 年代と 2000 年代における「コミュニケーション」の違いは、セックスにおいて男女が平等であることを原理とする自由主義から、不平等こそが原理となった新自由主義への変化であると理解できる。少なくとも 3.1 でみてきたような『an・an』の「セックス特集」からは、セックスにおいて両者が平等であるかどうかということよりも、自らの性を資本化し、いかに「うまくやる」かが関心事項となっていることが伺えよう。

このように、セックスがマネジメントの対象として前景化するというとは、他の社会構造の文脈から切り離されることでもある。ブラウンが「マルクスの考えたような疎外と搾取の基盤を抹消してしまう」（Brown 2015=2017: 67）と述べたように、社会構造の問題が後景化し不可視化されることである。つまり、平等でない性的関係のなかで実際に女性たちが経験する性的な脅かしや暴力そしてそれに対する不安が、社会構造から切り離されてしまうこととなる。

しかし、女性にとっては「ベッドの中」の不平等は、女性が男性に対して相対的に社会的に不利な立場に置かれているという「ベッドの外」の不平等と無関係ではない。例えば、ナオミ・ウルフが神経科学の知見をもとに論じるように、女性の

オーガズムや快楽獲得の仕組みは男性のものとは神経構造的に全く異なることに加え、「女性の性欲を増減させる信号の多くは、『ここは安全か?』という脳の問い合わせに関与している」、つまり女性自身が尊厳や安全を獲得しているかに大きく関わりがある (Wolf 2012=2014: 228)。ウルフの議論からは、男性の快楽を中心としたセックスで女性がオーガズムや快楽を獲得することは基本的には困難であることがわかる。

さらに、性行為を経験した女性のなかで、相手に避妊具を「つけてもらう」ための「駆け引き」を経験したことの無い女性、あるいは関係が悪化することを恐れて「駆け引き」すら放棄せざるを得ない状況と無関係の女性、そして、妊娠の可能性に対して恐怖を感じたことの無い女性が果たしてどれほど存在するのだろうか。しかし、セックスが社会構造から切り離されてしまうことによって、男性との関係構築が失敗した場合や、そのみでなく生じた不利益や不安については、自身が至らなかったためであり自己責任ということになってしまう。そのため、現にある不平等を社会的な問題として捉えるという契機はあらかじめ取り除かれ、仮に不平等や不安を感じるがあったとしても、あたかも平等であるかのように振舞い男性を喜ばせることが、セックスの場面においてまでも女性たちに要求されることとなる。

以上より、本節では『an・an』のセックス特集を手がかりに2000年代以降にはセックスをマネジメントする新自由主義的セクシュアリティが台頭していること、それはセックスにおける男女の不平等を原理とし問題を女性の自己責任とすることによって、結果として女性を性的に従属的な位置に留めることを論じてきた。このような、女性を性的な主体であることから遠ざける過程が、新自由主義的セクシュアリティにおいては、「安定」、「平等」、「親密性」、「コミュニケーション」を獲得したいという女性の選択性や主体性に依拠して推進されていく。それは、女性の主体性に依拠しつつ従属や責任を強いるという現代的な性管理の在り方ではないだろうか。

## 4. 2010年代フェミニズムとセクシュアリティ

### 4.1 2010年代のフェミニズム現象

現在の若い世代の女性達は、セクシュアリティの問題に対してどのような葛藤を抱え、またそれぞれ突破しようとしているのだろうか。本節では、2010年代に同時多発的に起こった若年世代のフェミニズムグループ活動や作成されたジン(ZINE)とミニコミ誌<sup>注12)</sup>の一部から検討していく。

欧米では、2008年ごろからはじまったと言われる、ソーシャルメディア、グローバル化、インターセクショナルリティ(複合差別)をキーワードにしたフェミニズムの新しい潮流が注目されている。日本においても、近年におけるソーシャルメディアの発達に女性運動に大きな影響を与えてきたといえる。最たる例として挙げられるのが、2017年にトランプ政権とその性差別への大規模な抗議としてワシントンD.Cで行われたウィメンズ・マーチであろう(1月21日)。プッシーハットと呼ばれるピンク色の毛糸帽子を被った人々に埋め尽くされた光景が世界中に駆け巡った。また、その光景は多くの女性を鼓舞し、日本でも3月8日に東京でもウィメンズ・マーチが開催されるなど、同時多発的にフェミニズム活動が生起する状況ができていっている。

国内では、3.11以降、反原発運動、反差別運動、政府に対する抗議運動のネットワークが広がり、人々が新たに政治的活動に参加していく状況がつけられてきた。それらのネットワークには、SNSを介して、または趣味や仕事のつながり等で運動に参加する人がイベントや活動の現場で出会っていくことによってなされていったが、多様な層の人々が出会うことにより、インターネット上に留まらず、デモ、イベント開催、ラジオ、小冊子の作成など表現や発信の方法も多様となっていた。

以上のような状況のなか、人権や差別について問題意識をもつ20代、30代の若年世代の女性たちが、学校や職場、日常生活だけではなく社会運動に関わっていく過程でも女性であるがゆえの不利益や差別を受けてきた経験を共有し合うことによって、フェミニズムを意識し自分たちで発信していく状況ができてきた。

2016年以降に東京で活動する女性たちによって作成された『NEW ERA Ladies』『NEW ERA Ladies #2』(図1(p. 8)参照)、関西の様々な 이슈の運動の中でつながった女性たちが作成した『Luv++』(Love Positive Plus)(図2(p. 8)参照)はアート分野で活動する女性たちの参加も多く、洗練されたデザインが特徴である。関西で若手研究者やライターを中心につくられた「怒りたい女子会」も2016年以降ミニコミ誌『コレアカ』『コレアカ vol.2』(図3(p. 8)参照)を制

作、また『コレアカ vol.3』を制作中である（表1（p. 8））。



図1 『NEW ERA Ladies #2』表紙（左）、『NEW ERA Ladies』表紙（右）



図2 『Luv++』表紙



図3 『コレアカ 創刊号』表紙（左）、『コレアカ vol.2』（右）

表1 ミニコミ誌一覧

書名	発行年月日	場所	連絡先	値段
『NEW ERA Ladies』	2016年	東京	neweraladies@gmail.com、instagram.com/super.kiki/（インスタグラム）	1200円
『NEW ERA Ladies #2』	2017年	東京	neweraladies@gmail.com、instagram.com/super.kiki/（インスタグラム）	1200円
『Luv++』（Love Positive Plus）	2017年	関西	getonmyaxe@gmail.com	500円
『コレアカ』『コレアカ vol. 2』	2016年	関西	怒りたい女子会 HP 問い合わせフォーム <a href="http://koreakan.xyz/book/368">http://koreakan.xyz/book/368</a>	300円
『コレアカ vol. 3』	2018年	関西	怒りたい女子会 HP 問い合わせフォーム <a href="http://koreakan.xyz/book/368">http://koreakan.xyz/book/368</a>	500円

ミニコミ、ジンといった非公式出版物の作成は、消費文化産業によってではなく個人によって制作された、フェミニズムの「参加型メディア（participatory media）」の歴史に位置づけられる。ミニコミ誌、ジンは1960、70年代の女性が公的な場で発言する機会が限られていた時代から、自己表現とコミュニケーションのメディアとして機能してきた（上谷 2013）。近年女性たちによって作成されはじめたジンやミニコミ誌からは、セクハラ、痴漢、性暴力は大きな関心事でありながらも公

の場やインターネットではまだ発言がし難いテーマであることがわかる。女性たちからすると、インターネットや社会運動の場は、まだまだ安心して自己主張を行うことが難しい場であると言うこともできる。

#### 4.2 問題告発の難しさ

それぞれの内容をみても、仕事、子育て、ライフコースなど様々なテーマがあるなかでも最も多くのボリュームが割かれているのが、セクハラ、痴漢、性暴力被害についてであり、関心の高さが伺える。「ささいな問題である」「よくあること」として受け流されがちな自分の身体や権利が侵害されるような経験を共有する記事が中心である。

ここで注目したいのは、それぞれのミニコミ誌、ジンの内容において性的被害の経験や違和感を述べる時に、「モヤっと」「モヤモヤ」というワーディングが頻繁に登場することである。「怒りたい女子会」では、ミニコミ誌でも詳細が紹介されている主催ワークショップは「モヤモヤぶっちゃけトーク&ワークショップ」と名付けられており、「モヤモヤ」を言葉にする実践として位置付けられている。この「モヤモヤ」というワーディングは、問題を問題として告発する難しさの象徴として用いられる。

モヤモヤするのに怒れない。でもそれって、私たちが怒らせないような仕組みが、いろんなどころに張り巡らされてるみたい。ほんとは怒っていいこと、「これあかんやつや」って言っていることは、もっとたくさんあるはず。だから私たちは、怒れないことに怒り、通りすぎて行くモヤモヤひとつひとつに立ち止まって、声を出し、言葉にしていこうと思う。(怒りたい女子会 HP より<sup>注13)</sup>)

『Luv++』では、仲のいい友人関係や強制でない性関係などにおいて経験した性的侵害や女性差別に対して、拒否できなかったことや「場の空気を読んで」しまったことが語られている。性的侵害が被害として社会的に認められにくい、また自身も自己責任であると内面化してしまうという葛藤の存在が伺える。特に性的侵害については、友人関係や恋愛関係といった自らが選択し望んだ「対等なはず」の関係においておこなわれることが多く、問題を表明することを困難にさせている。これらのジンやミニコミでは、なぜ自分たちはこんなにも声をあげることが困難なのか、なぜ拒否することが難しいのか、ということ自体が共有されるべきテーマとしてあり、自己責任ではなく、女性たちが集い語り合うことによって乗り越えていくべきこととされている。

女性たちは主体的に性的関係を築き、対等な関係性を構築していく中において、男性中心のセクスカルチャーや行為が依然として支配的であり網の目のように張り巡らされていることに気づく。セックスにおける相互性や対等性を志向しつつも「コミュニケーションとしてのセックス」と言い切るには、そこにはあまりに非対称性や不平等が存在することを女性たちは見抜いている。

#### 4.3 自分たちの視点でセックスを語る

近年女性たちによって作成されはじめたジンやミニコミ誌の内容をさらにみていくと、男性の特権的な領域であった「エロ」に対して、自身の性的自由の在り方や快樂について、自分たちのカルチャーのなかで捉えなおしていくことが重視されていることがわかる。

『NEW ERA Ladies』の巻頭言「Dear Ladies」には、「高齢者が保守的なことには『そんなもんか』と、まだ諦めがつくけれど、ファッション誌までもが『料理をうまく取り分けるコツ』『愛される条件』『愛されメイク』はたまた『愛されるSEX』として『墮トレ』を推奨したり、女性を受動的にとらえた特集にページを割いていることを『ありふれた光景』にしちゃダメなんじゃない?」という一節があり、セクスカルチャーの変革が明確に企図されていることがわかる。続いた『NEW ERA Ladies #2』では、袋とじページが設けられ、オナニー、AV、避妊グッズなども含めた自身にとってのエロとはどのようなものであるかについて語られている。『Luv++』でも、自身の身体や性欲を他人視点でなく自分視点で捉えなおしていくことがテーマのエッセイが多い。怒りたい女子会による『コレアカ』では、性風俗がテーマとして大きく取り上げられている。創刊号では、レンタルビデオショップのアダルトコーナーへの「潜入」記やAVの視聴感想記、『コレアカ vol.2』では、性風俗利用体験記がみられる。いずれも、既存のセックス産業やセクスカルチャーを通して、自らの欲望、感覚、好きなことに向き合うことへの挑戦として位置付けられよう。

これらのジンやミニコミ誌に共通することは、女性差別や性暴力を語ることと性的欲望を語るものが地続きのものとして存在している点である。そこにあるのは、身体や性器を傷つけられたり、侵害されたり、観念的に貶められる経験を女性達

が集まり語り合うことによって共有し、そのことを通じて自分自身にとっての欲望や喜びのありかを手探りで追求する、自分のからだから考えはじめる女性たちの姿である。

## 5. 方法を受け継ぎ、時代に立ち向かう

最後に、本稿のはじめに紹介したイベント「わたしのアソコに呼び名がない」的一幕を紹介する。本イベントでは「私の〇〇は〇〇〇〇と言っている！」という紙に参加者に好きな性器の呼び名と言葉を書いてもらうというワークショップが行われた。ファシリテーターを務めた性教育アドバイザーのあかたちかこ氏のアドバイスにより、あくまで特定の呼び方を薦めることはせずに各々の好きな呼び名で表現してもらった（図4 (p. 10)、図5 (p. 10)）。

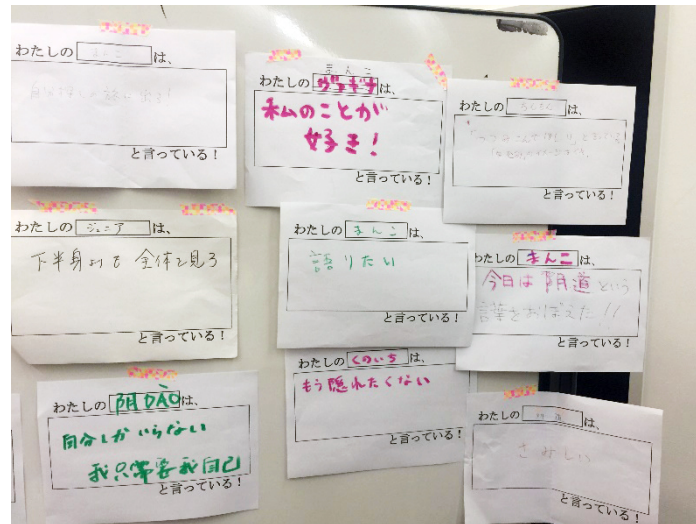


図4 ワークショップで書かれたカードを貼り出す

- ・わたしの陰道は、さみしいと言っている！
- ・わたしのべっちょ（あまりきれいな語感ではないですが、東北の農村で育ちたしかにあまり抵抗のないことばとして接していました）は、今日も元気にここにいますと言っている！
- ・わたしの陰Daoは自分しかいらぬと言っている！
- ・わたしのまんまんちゃんは沢山旅をしてきたのでたまには休みたいと言っている！
- ・わたしのヴァギナは平和にくらいしたいと言っている！
- ・わたしの陰茎は原初的な感覚で語り合いたい（コミュニケーションをとりたい）言っている！
- ・わたしのまんこはチンチンは必要じゃねえと言っている！
- ・わたしの陰道は我只想要, 我想要的快乐と言っている！（わたしのまんこは私は自分がほしい快樂しかいらぬと言っている！）
- ・わたしのアニメはどこか別の場所につれてってと言っている！
- ・わたしのむすめちゃんはムリにつかう必要はないと言っている！
- ・わたしの？ はわたしにとってはそんな特別な体の部分ではない！と言っている！
- ・わたしのおまんこはfaster, higher, stronger言っている！
- ・わたしのおまんこは「入れられる」んじゃない！あたしが飲み込むんだよ！と言っている！
- ・わたしのペニスをもっと持ち主に私のことに関心をもってほしいと言っている！
- ・わたしのおネコ(ノラ)は自由(ノラ)でいたいと言っている！
- ・わたしのちんちゃんは「つつみこんでほしい」「突っ込み」のイメージはイヤと言っている！
- ・わたしのまんこは私のことが好き！と言っている！
- ・わたしのまんこは今日は陰道という言葉をおぼえた！と言っている！
- ・わたしのまんこは語りたいたいと言っている！
- ・わたしの娘はさぼりたいと言っている！
- ・わたしの・・・は男に女の身体を語らせるな、もっと怒れ！と言っている！
- ・わたしの子宮への入り口は入れたくないものは絶対に入れたくないと言っている！
- ・わたしのおちんちんは汚れてないぞきたなくないぞと言っている！
- ・わたしのムチュメタンは気分次第だよと言っている！
- ・わたしの陰道の花は陰道は花のつぼみ、好きな人に会えばほころぶの、と言っている！
- ・わたしのオマンコは好奇心を満たしたい！と言っている！
- ・わたしのくのいちはもう隠れたくないと言っている！
- ・わたしのまんこは自分探しの旅に出ろ！と言っている！
- ・わたしのジュニアは下半身よりも全体を見ろと言っている！
- ・わたしのべべは最近ひまなんだけど！と言っている！

図5 わたしの〇〇は〇〇〇〇と言っている！一覧

ここでイベント参加者による、「わたしの〇〇は〇〇〇〇と言っている！」の一覧（図5 (p. 10)）をみてみよう。女性器の呼び方に「まんこ」「おまんこ」を使った人は4分の1ほどみられた。一般的に女性にとってはワイセツで忌避感のあるも

のを、あえて自分自身の選択として「おまんこ」を呼ぶことが女性器を自分のものとして「取り戻す」ことにつながっていくというのがワークショップの主旨でもあった。ワークショップでは、他にも、「むすめちゃん」「ムチュメタン」「ジュニア」と娘のように呼ぶ人もみられた。男性器が「息子」とまるで人格をもつ存在かのように称されることに対して、女性器は陰の存在として隠され続けてきたが、ここでは、男性器と対等な存在として女性器を位置づけている、また自らにとって大切なからだの一部であるという意味が伺える。

語りかける内容については、様々ではあるが基本的には性行為を念頭においたものが殆どである。そこでは、「さみしい」「最近ひまなんだけど!」というものもあれば、例えば「自分しかいない」「平和にくらいしたい」「自分がほしい快樂しかいない」「『入れられる』んじゃない!あたしが『飲み込む』んだよ」「ムリに使う必要はない」というものもある。女性器は性行為において繋がりや快樂を得る場所である一方で、傷つけ/傷つけられる可能性をもつ場所でもあることが踏まえられていることがわかる。しかし、それらを引き受けた上でなお自分の性の主体であろうという意思が表現されている。そして、「さぼりたい」「語りたい」「わたしのことが好き」「怒れ!」「自分探しの旅にでろ!」というように、女性器にとって「愛する」対象は性行為の相手だけではなく、自分自身であるというものもみられる。

本稿では、なぜ今女性が女性器について考えていくことが重要であるのかという問いに対して、1970年代の女性運動での女性器への注目、2000年代以降の性規範、そして近年の女性たちのフェミニズム活動についての検討を通じて、女性の主体性に依拠しつつ男女の不平等を前提化する新自由主義的セクシュアリティの台頭と、女性たちによる抵抗の試みを明らかにしてきた。女性たちによる、性の問題に対する告発や声のあげにくさへの違和感の表明を行い、自らの視点から性を捉えなおすことで乗り越えてこうという活動は、新自由主義的セクシュアリティに対する窮屈さや欺瞞性への洞察と、何より彼女たちが直接的に出会い、語り、経験を共有することで可能となっている。今日の女性たちの活動では、SNSを通じたやり取りだけにとどまらず、直接的なつながりややり取りがベースとなるジンやミニコミ誌の制作、本プロジェクトにおけるワークショップのような空間を共有した集いが、性暴力の問題を共有し自分たちの欲望についても安心して語れる場所として機能している。1970年代の運動においてつくられてきたCRや自身の身体に立ち返るというリブ運動において作り上げられてきた手法が、今日の女性たちの活動においても受け継がれ、彼女たちの抵抗の原点となっている。そして、そのような手法によって女性たちが自分の性や身体、そして自らを大切にする術を知ることは、性的な不平等や従属の要請が女性に対してより巧妙に仕向けられる今日の新自由主義的な状況において、より一層意義をもつものとなっているのではないだろうか。

## 【付記】

本稿は、平成26-29年度科学研究費基盤(B)研究課題「ジェンダー平等社会の実現に資する研究と運動の架橋とネットワーク」(課題番号26283013)の助成を受けた研究成果の一部である。

<https://doi.org/10.18910/67844>

## 文 献

ボストン女の健康の本集団編著, 1988, 『からだ・私たち自身』松香堂書店。

Brown, Wendy., 2015, *Undoing the Demos: Neoliberalism's Stealth Revolution*, Zone Books. (= 2017, 中井亜佐子訳『いかにして民主主義が失われていくか』みすず書房.)

Duncombe, Stephen., 2008, *Notes from Underground: Zines and the Politics of Alternative Culture*, Microcosm Publishing.

Foucault, Michel, 2004, *The Birth of Biopolitics: Lectures at the Collège de France, 1978-79*, ed. Michel Senellart, trans. Graham Burchell, New York. (= 2008, 慎改康之訳『ミシェル・フーコー講義集成〈8〉生政治の誕生』筑摩書房.)

イヴ・エンスラー著・岸本佐知子訳, 2002, 『ヴァギナ・モノローグ』白水社。

木村涼子, 2000, 「女性の人權と教育—女性問題学習における主体形成と自己表現—」『国立婦人教育会館研究紀要』第4号: 35-42.

北原みのり, 2011, 『アンアンのセックスできれいになれた?』朝日新聞出版。

北原恵, 1998, 「招待」への再考—《ディナー・パーティ》をめぐるフェミニズム美術批評」東京大学大学院総合文化

研究科『超域文化科学紀要』第3号：98-118.

Millett, Kate, 1970, *Sexual Politics*, NY: Doubleday & Co. (=1985, 藤枝滯子ほか訳『性の政治学』ドメス出版).

溝口明代・佐伯洋子・三木草子編, 1994, 『資料 日本 ウーマンリブ史 II』松香堂.

三浦まり, 2015, 「新自由主義的母性——「女性活躍」政策の矛盾」お茶の水ジェンダーセンター年報『ジェンダー研究』18: 53-68.

柯倩婷著・熱田敬子訳, 2017, 「グループを育て、社会とつなげる——大学でのジェンダー教育を活性化する新しい試み」

村田晶子・弓削尚子編著『なぜジェンダー教育を大学でおこなうのか：日本と海外の比較から考える』青弓社.

松本彩子, 2005, 『ピルはなぜ歓迎されないのか』勁草書房.

中山千夏, 1977, 『からだノート』ダイヤモンド社.

荻野美穂, 2014, 『女のからだ フェミニズム以後』岩波書店.

田中亜以子, 2007, 「ウーマン・リブの『性解放』再考——ベッドの中の対等性獲得に向けて——」『女性学年報』28: 97-117.

佐藤嘉幸, 2009, 『新自由主義と権力——フーコーから現存在の哲学へ』人文書院.

上野千鶴子, 1988, 『女遊び』学陽書房.

上谷香陽, 2013, 「ガール・ジンからみる第三波フェミニズム アリソン・ピープマイヤー著『ガール・ジン』を読む」『文教大学国際学部紀要』24(1): 1-16.

Wolf, Naomi, 2012, *Vagina: A New Biology*, Ecco. (=2014, 桃井緑美子訳『ヴァギナ』青土社.)

---

## Abstract

### The Resistance of Young Japanese Women Against “Neoliberal Sexuality”

Rie Motohashi

The purpose of this paper is to answer the following questions: in the 2010s, how did sexual norms surrounding women change compared to the 1970s and what kind of reality about sex do young women have? In *The Vagina Monologues* (1996) by Eve Ensler, women challenged the taboo to say “vagina” with panache, because it has been demanded that women are sexually obedient. Today, the taboo still exists and women in Japan have not claimed the names of their reproductive organs. What kinds of difficulties still make women sexually obedient into the 2010s and how can we resist these difficulties?

To answer this question, I analyze the women’s liberation movements in America and Japan in 1970s to examine the significance of women’s sexual organs to women in visualize the violence against women as a social problem and to gain sexual agency

Then, I explore the secular trends from the 1970s through the 2000s in Japan, about sex in *Anan*, a Japanese women’s magazine. In 2000s, young women’s sexuality has become the capital for themselves and they have been demanded that they have the viewpoint of the manager about their sex. I labeled this sexual-norm “Neoliberal Sexuality”, which replaces the male-female gender conflict with the women’s self-responsibility as a social problem.

Finally, through analysis the contents of the “ZINE”, which was produced by young feminist activists in the 2010s, I examine how the young feminists opposed to Neoliberal Sexuality are using the same methods as those of the feminists in 1970s like consciousness raising (CR).

I conclude that Neoliberal Sexuality has led women to be sexual subordinates “spontaneously” and is the new phase of the sexual control. However, women’s talks and studies about their bodies, especially sexual organs, based on their experiences can be the source of the resistance against this control.

Keywords: *The Vagina Monologues*, Sexuality, Neo-liberalism, Self-responsibility, Girl Zines



## 注 釈 一 覧

### 新自由主義的セクシュアリティと若手フェミニストたちの抵抗

- 1) 「ジェンダー平等社会の実現に資する研究と運動の架橋とネットワークング」。本プロジェクトの詳細については序章を参照していただきたい。(p. 1)
- 2) この会で紹介されたドキュメンタリー映画『来自阴道 The VaChina Monologues』と中国の若い20代~30代のフェミニストたちの実践は非常に刺激のかつ示唆に富むものであった。詳細については、村田晶子・弓削尚子編著『なぜジェンダー教育を大学でおこなうのか—日本と海外の比較から』に収録されている、柯倩婷著、熱田敬子訳「グループを育て、社会とつなげる——大学でのジェンダー教育を活性化する新しい試み」を参照していただきたい。(p. 1)
- 3) 「おまんこ」「おめこ」が性行為を指す言葉であってきたのは、女性器と性行為をイコールのものとし、つまり性行為の時にしか女性器を必要としない男性中心的な価値観が反映されている(中山 1977)。(p. 1)
- 4) アメリカの「性革命」については、立花隆『アメリカ性革命報告』(1979)、亀井俊介『性革命のアメリカ—ユートピアはどこに』(1989)を参照されたい。(p. 1)
- 5) 膣腔を広げ、内部を検診しやすくする為に使用される医療器具。(p. 2)
- 6) Anne Koed., 1970, *The Myth of the Vaginal Orgasm*. <http://www.feministezine.com/feminist/modern/The-Myth-of-the-Vaginal-Orgasm.html> (2018年1月9日閲覧) (p. 3)
- 7) 「ディナーパーティー」は、神話や寓話に登場する架空の人物も含む著名な39人の女性に捧げられたものであり、それぞれのテーブルには刺繍やペインティングにより全て異なるデザインの花や蝶に基づく装飾が施されている。テーブルに掛けられたクロスの前方にはそれぞれの女性たちの名前が刺繍されている(北原 1998)。(p. 3)
- 8) 「人は自分の恋愛生活にたいして企業家や投資家のようなやり方で取り組んだとしても、この領域において貨幣的富を生成したり、集積したり、投資したりしようとはしないだろう」(Brown 2015 = 2017: 27)、「今日、ホモ・エコノミクスはこの企業家精神という面を維持しているが、金融化された人的資本としてかなりの部分で再形成もされている。つまりそのプロジェクトとは、自身の実際の、あるいは比喩的な信用格付けにつねに注意を向けることをつうじで、自身の価値を高めるか、投資を誘致するために自己投資することであり、またこうしたことを自己の存在のすべての領域において行うということである」(Brown 2015 = 2017: 29) (p. 5)
- 9) 例えば三浦(2015)は、「女性活躍」政策における女性就労支援には、①女性の労働力や消費力をみこんだ経済成長の促進、②ワークライフバランス政策に象徴されるような母親に就労と子育てを両立させる少子化対策、③育児休業により女性が子育てを家庭でおこなうことによる社会保障費の削減、という3つの狙いがあるが、ジェンダー平等が低く位置付けられているなかこの3つは実際には矛盾し合うことになると述べる(三浦 2015: 55)。(p. 5)
- 10) 総務省統計局ホームページ「最近の正規・非正規雇用の特徴」<http://www.stat.go.jp/info/today/097.htm> (2018年1月3日閲覧) (p. 5)
- 11) Michel Foucault, 2004, *The Birth of Biopolitics: Lectures at the Collège de France, 1978-79*, ed. Michel Senellart, trans. Graham Burchell, New York (= 2008, 慎改康之訳、『生政治の誕生』筑摩書房。) (p. 6)
- 12) ジン(ZINE)とは、アメリカ合衆国のオルタナティブ・プレスの歴史の中で作られた、作り手自身が生産し、出版し、流通させる、商業的でも専門的でもなく、小規模で読まれる紙媒体の雑誌(magazine)を指す(Duncombe 2008)。アメリカで1990年以降みられる、アカデミアでもなく既存の団体にも属さない若い女性によって制作された小冊子は「ガール・ジン(girl zine)」と呼ばれる。本稿では、制作者が自らのメディアをどのように表現しているかに則り、適宜ジンまたはミニコミと表現している。(p. 7)
- 13) 怒りたい女子会ホームページ、<http://koreakan.xyz/> (12月19日閲覧。) (p. 9)